

子どもの文化

2017
3

子どもの文化研究所

生きる力を育む親・家庭の力



なんとかしたい！ そんな大人の応援を

—タイ教育支援 NGO の現場から—

子どもの文化 ホットライブ ホットジャーナル

松尾久美 (マレットファン (夢のたね))

子どもに関わるおとなの応援団を 立ち上げる

「なんとかしたいー」こんな切実な想いを
持ち、タイの困難を抱える地域、スラム、山
岳民族の村や移民地区で、日々子どもたちと
向き合うおとなたちに出会ってきました。私
がタイの教育支援 NGO で活動してきた10年
余りの間に出会った何人もの顔が思い浮かび
ます。そんな方々に出会うたび、感動し畏敬
の念を覚えてきたものです。そして、その周
りにはいつも生き生きと遊び、学ぶ子どもた
ちの姿がありました。

バンコクのスラム地区の保育園で、「毎日、
生活のため、子どものためと必死に働く親た
ちをなんとか助けられれば」と休日も辞して
子どもたちを受け入れる園長先生。北部カレ
ン族の山村の学校で「さらに高地に住む子ど
もたちになんとか教育の機会を」と支援する
地元企業、慈善団体から寄付をかき集めて5
00人分の寮を建設してきた校長先生。

国境沿いのミャンマー移民の小学校では、
3年生ともなれば大切な働き手となり、通学
を億劫がる子どもたちに「なんとかして学校
に來たいと思わせたい」と楽しい授業を工夫
する若い先生。どの方も環境の不条理を嘆く
のでなく、私心を捨ててなんとか改善の道を
探ろうと努力する方々でした。

2013年、この「なんとかしたいー」を
応援したい！と、私とタイ人の仲間の3人
で子どもに関わるおとなを応援する NGO
「マレットファン (夢のたね)」を立ち上げま
した。経済的に発展を遂げてきたタイの中で
残された困難な環境を抜本的に改善すること
はとても重要なことですが、政治的な問題を
はらんでいることが多く、対処には時間がか
かります。改善されるまでにも、現場には子
どものためにと奮闘しているおとなたちがい
ます。この人たちをサポートするためにまず、
何をすべきか考えました。

そこで、現場からのニーズが高く、自分た
ちの経験や日本の保育・教育の専門家から学



ワークショップで
ロボットを作る子ども



んできたスキルが生かせるワークショップを
主な事業としました。とりわけ、私たちがコ
ンセプトにしている「子ども主体の遊び」を
中心にしました。10年前よりタイの指導要領
に記載され、取組みへの意識は芽生えている
ものの、現場では具体的イメージを持ってず試
行錯誤している状況です。※マレットファン設
立前後の詳しい活動については「マレットファン
夢のたねまき」（村中李衣著、新日本出版）でご覧
いただけます。

さて、今回は4年間のマレットファンの活
動の中で印象深かった子ども、おとなたちの
ことを紹介させていただきます。

児童養護施設でのワークショップ

2015年に5〜15歳の男児が生活するバ
ンコク近郊の養護施設で、40人の8歳児に絵
本を読んだり、ゲームをしたりした後に、遊
びのワークショップを実施した時のことです。
子どもたちがいつも飲んでる牛乳のパック
を使ったおもちゃ作りのプログラムです。事

前に色紙を貼り付けた牛乳パックに顔と手をつけてロボットを作り、ペットボトルの発射機を使って飛ばしてみます。遊び方を知って興味を示し、子どもたちは自分でロボットが作れると知って大喜び。体を乗り出して作り方の説明を見つめていました。早い子は20分ほどで仕上げ、すぐに発射台を使って、飛ばし始めました。ひとりで真剣に飛ばし方を工夫している子も、友だちと「せーのっ！」で飛ばしては歓声をあげている子も、デザインの詳細までこだわり、ゆっくりと作り続ける子もいます。最後にはみんなでオリジナルのロボットをボーンと飛ばして、大歓声をあげていました。

子どもたちの退室後、施設職員の方々10人との振り返りの時間を持ちました。先月に行われた全国の養護施設20か所の職員対象の「絵本・あそびのワークショップ」に参加した方が2人おられました。が、「あんなに一生懸命、なにかを作る姿はみたことがない」「ワークショップで学んだ活動では、実践で



手づくりのロボットと
一緒に記念撮影

の子どもたちの反応にびっくり」「今後も継続していきたいね」と若手、中堅の職員たちからも活発に意見が出され、ひと段落した後、副施設長があらたまった表情で次のように話されました。彼女は終始、穏やかな表情で活動を見守られていた50代後半の女性です。子どもたちがロボット遊びに夢中になっている時、ひとりの男の子が心配そうな表情で話しかけてきたのだそうです。「せんせい、今夜このロボットと一緒に寝てもいいの?」と。彼女は涙がにじむのをこらえながら話されました。「自分で作った、ひとつしかない自分だけのロボットだものね、そういうものが彼らにとってはおほんとい少ないね」と。

廃材を使った手作りおもちゃが、楽しく簡単にできるといっただけでなく、自分で作れたという喜びや誇り、そのモノを大切に思う気持ちも育む活動なのだ、職員の方々と、私たちスタッフも改めて学ばされた瞬間でした。

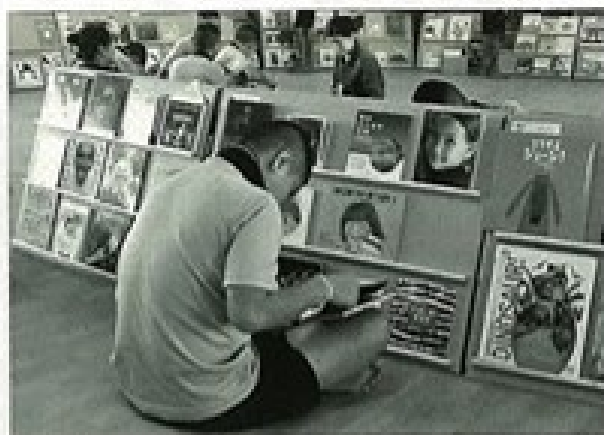
少年鑑別所でのびかり

2016年12月、バンコクの少年鑑別所で、「えほんのひろば」を開催した時のことです。ここはタイ最大規模の施設で常時200人ほどの少年が生活をしています。温厚なお人柄と強い信念を持った所長は50代半ばの男性です。鑑別所で前例のない今回の活動開催を即決された理由をこう話してくださいました。

「当所は、何らかの間違いを犯した少年たちが生活をしている。彼らの多くは家庭に問題を抱えている。もちろん初めての子もいるが、何回も入所する子もいる。ただ単に規則的な生活を管理する場でなく、彼らが自身を顧みて新たに人生を歩むための力を育む場でありたい。しかし現状は、それを担う職員のモチベーションは低く、少年たちを見る目に未来への期待が感じられない。その点、外部団体の、特にNGOのスタッフの関わりと、またそれを受けた少年たちの姿から何かを職員に感じてもらいたい」と、事前の打合せでお話しされた所長の言葉に、大きな責任感を感じながらも深く共感し企画を練り直しまし



「マレットファン―夢のたねまき」
村中李衣著 新日本出版社



「えほんのひろば」で
絵本を楽しむ少年

〇には荷が重いのではと驚きながらも大きな
変革の一助を担える機会に胸を躍らせていま
す。「なんとかしたい！」と活動する方の広
い視野と素早い決断に改めて感激したのです。

これからも活動を続けていく

子どもたちのためにと奮闘するおとなを応
援したいとつくった団体ですが、4年間の活
動を振り返ると自分たちが応援してもらい、
元気をもらってきたことばかりでした。子ど
もたち、先生たちの気づき、喜びがきらめく
瞬間を共にできたことが活動の一番の報酬で
あり、その瞬間の一人ひとりの心、体の動き
こそ、創造的な発想、さらなる活動の可能性
を学ぶことができるのだということがわかり
かけてきたところです。

「どうしてタイの子どもたちは、こんなに
生き生きしているんだろう？」。タイに通い
だした20代の頃、常に心に浮かぶ問いであり、
その答えを知りたいという思いがタイで活動
を始めた動機でもありました。バンコクのス

ラム地区や北部の山岳民族の村で元気よく遊
ぶ子どもたちと触れ、日本で自分が接する子
どもの姿との違いを感じていたのです。10年
以上がたった今、この問いが簡単に答えの出
せないものであること、そもそも主観論でし
かなかったことがわかりました。

しかし今、少し答えになるかもしれないと
思うことがあります。それは、すごいーと
思えるおとな、こんな人になりたいなど感じ
るおとな、そういうおとなとの出会いが、子
どもが夢をもつきっかけになるのではないか。
そんなおとなに出会っていることが、大変に
みえる環境で育っている子どもたちが時に生
き生きとたくましく見える理由なのではない
かということなのです。

今後一つ一つのNGO団体として、そんなお
となたちの応援団としての使命を果たし、ま
ずは自分たちが社会の課題に前向きに取り組
み、子どもたちが夢を感じられるおとなのひ
とりになっていきたいと思えます。